

平成24年度 国立情報学研究所 市民講座 第3回  
「専門用語の構造～新しい言葉が生まれるとき～」  
講師：小山 照夫  
(国立情報学研究所 情報社会相関研究系 教授)

◆ 講 義 ◆

本日は、専門用語について少しお話させていただきたいと思います。

・スライド2「専門用語」

専門用語というと、「どうしてあんな分かりにくい言葉を使うのだ」「あれでは何を言っているか全然分からない」と、非常に評判が悪いものです。しかしながら、われわれが例えば学会等でお話ししようとする、専門用語を使わずにしゃべれと思われても、途端に困ってしまいます。専門の話をしようと思うと、どうしても専門用語とは縁が切れません。

しかし、結局同じ日本語を使っているのに、なぜ一般の方は「専門用語が分からない」「なぜあんな訳の分からない言葉を使うのか」と言うのか。一方で、なぜわれわれは専門用語を使わないと、ちっとも議論ができないのか。これは、ある意味で不思議なことです。

今日はそのあたりの背景をお話しさせていただこうと思います。簡単に言うと、そもそもわれわれが話している言葉そのものに、そういうところがあるからです。また、当たり前と思われるかもしれませんが、やはり専門分野というのは少し特殊なものだからです。このような二つの点があるかと思っています。

・スライド3「自然言語（日本語や英語などの言葉）の使用」

最初に、言葉の特性について考えてみたいと思います。

「自然言語」などと言うとまた評判が悪いのですが、要するに人間が普通に話している言葉のことです。コンピュータが使う言葉ではないということを強調するために「自然言語」という言い方をします。日本語や英語などは、われわれの言い方では「自然言語」になります。

日常、皆さんは、言葉でいろいろなお話をしていますが、基本的には情報を交換するために言葉で話しています。ただ、ここで少し考えていただきたいのは、どういう情報を交換したいと思っているのか、それに関して全部を話しているのかということが、実は結構面白い問題なのです。

実際に見てみると、本当に言葉として口に出しているものは、意外に情報としては少なく、大したことは話していません。それにもかかわらず、結構便利に意見交換がされてきている。それはなぜかという問題があります。

・スライド4「自然言語使用の背景」

その背景として、聞き手も話し手も常識やその場の状況を非常にセンシティブに感じ取り、そこから言葉には出てこないような情報を補足しているから、少ない言葉でたくさんのが伝わっているのだということがあります。これは一見奇妙で、何でもかんでも全部話してしまえばいいではないかと思うかもしれませんが、実はそうではありません。話すということは意外に時間を食うことで、何

でも話そうと思うと非常にたくさんの時間が必要になります。

それから面白いことですが、他人の言葉で言うてしまうよりは、あえて自分の言葉で、自分の状況判断で了解してしまった方が納得がいくということがあります。そのために、言葉で話される情報はなるべく省略したがるのです。これは、情報交換をする上では非常に優れた戦略です。

#### ・スライド5「言語使用の例」

例として、このような会話を考えてください。

「今度犬を飼うことにしたんだ」

「そう、いいね」

ごく普通の言い方ですね。これだけで終わってしまうことに、皆さん何の疑問もないと思います。しかし、ここで言っている「犬」とは一体何かということが気にならないでしょうか。

#### ・スライド6「犬のキャラクターの画像」

これは最近、この研究所で使っているマスコットキャラクターですが、こういうものは多分考えていないだろうと思われれます。

#### ・スライド7「チワワの写真」

#### ・スライド8「ドーベルマンの写真」

しかし、犬というものの中には、チワワのように非常に小さな犬もいれば、非常に大きな犬もいます。これはドーベルマンなのですが、グレートデーンなどを持ってきた方がよかったですでしょうか。このように、小さな犬と大きな犬とを同列にして話をしていいのかどうか、やはり気になると思うのです。しかし、普段はほとんど気にせず、「犬を飼うことにしたんだ」「いいね」ぐらいで終わってしまうのですね。

#### ・スライド9「『犬』の示すもの」

では、なぜ問題にならないのかというと、常識や状況、話し手と聞き手の関係から、大体のことは推定できてしまうからです。非常にたくさんの種類がいるけれど、単に「犬を飼う」と言っただけで、大型犬なのか小型犬なのか、ペットにするのか、番をさせるのかといったことを、聞き手の方がかなりの程度推定できてしまうということです。

例えば、日本の特に東京辺りだと、一般的にマンション住まいの方が多いと思いますので、あまり大きな犬は飼えませんね。ですから、そういうものは最初から除外しています。また、例えば以前の会話で、娘さんの情操教育がどうこうという話が出たから、多分、娘さんの相手をしてもらうためのかわいい犬を飼いたいのだろうなど考える。あるいは、本人が最近運動不足だと言っていたことを考えると、散歩のお共に連れて歩くような中型犬くらいを考えているのだろうと思う。そういうことを、いわゆる常識や、聞き手と話し手の関係から大体推定できてしまいます。そして、その推定の結果、ごく普通のありふれた話だと思うと、普通はそれ以上のことをごちゃごちゃ聞くことはしません。

#### ・スライド10「推定ができるのは常識による」

この推定は、基本的には常識によるものです。日本の一般的な生活様式を知っていると、話し手の状況がある程度知っているなど、これに続いておおよそのことが分かってしまいます。その結果、あまり変なことではなければ、あまりそれ以上詳しい話をごちゃごちゃ聞いてみようという気には普通はならないということです。

この状況というのなかなか妙なところがあり、例えば単に「犬を飼うことにした」という話が、実は誰か探偵を雇って、誰かのことを調べさせようという意味になる可能性もあるわけです。状況がある程度伝わっていると、そういうことも起き得るのです。

#### ・スライド11「ただし詳細が必要となる場合もある」

一方で、全部が全部を聞き流していいわけではなく、細かいところが必要になることもあります。

聞いた話をただ話として済ませてしまう分には特に問題ないのですが、聞いた話から何かをしなればいけないと思いついたとします。そうすると、かなり詳しい話が必要になってくるという状況が起きます。

犬に関して意見交換しましょうなどという話になると、犬を飼うというときに、一体どんな種類の犬なのかきちんと分からないと、なかなかそれ以上の話が進みません。それから、「自分ではどんな犬がいいか分からない」と言っていたので、犬の選び方について何かアドバイスしてあげなくては行けないと感じたときにも、やはりもう少し詳しい情報が必要になってきます。どんな犬と、どんな付き合い方をするつもりなのか、どんな場所で飼うのか、誰が面倒を見るのかなど、詳しい話をどんどん聞いていくことになります。

#### ・スライド12「自然言語使用の原則」

以上をまとめると、自然言語（人間が普通に使っている言葉）を使うときの原則としては、常識と状況でかなりの部分を推定しており、ほとんどの場合はそれだけで十分なので、それ以上の話はあまり気にしないというのが普通の言葉の使い方です。

しかしながら、何らかの情報に基づいて、それ以上の深い行動を起こそうとしたときは、やはり詳しいところをいちいち確認しなければいけません。

そうでなければ、そのまま聞き流してしまうのです。

#### ・スライド13「専門用語の分かりにくさ」

専門用語は分かりにくいということですが、ここでは、その対象について話します。専門分野の話をする場合は大抵、犬の話のように一般的な話で済ませてしまうことができません。非常に細かく分類された、「こんな、こんな、こんな・・・」と、詳しく説明しなければならなくなります。とにかく詳しいところがどうしても必要になってくるのです。

それから、常識や状況が非常に重要だと話しましたが、ここでは分野の常識が必要になります。これがまた非常に面倒くさくて、専門用語が分からない原因のかなりの部分をこれが占めてしまいます。われわれは情報処理のようなものを専門にしている、その中で議論していると、こんなことは、

この分野の人なら何も言わなくても分かっているという話が非常にたくさんあります。しかし、大体は分かっていると思っていたような話が、振り返って考えると、普通の会話をするときには全然明らかではない、常識ではないということがあります。そのように、一般常識とは異なる分野常識を背景にして、言葉を使っているのです。

#### ・スライド14「専門用語の使われる局面」

では、専門用語はどんなところで使われているのでしょうか。基本的には研究論文やその発表、技術資料といったものです。文科系の学問では少し違うことがあるはずですが、ひとまず科学技術に限定すると、大体このような局面で専門用語が使われることになります。こういったものは、本来、非常に細かい説明を必要とします。理想としては、そこに書かれていることをそのまま実行すれば、同じ結果が出てくるような、追試実験ができる程度に詳しく説明することが求められています。

ですから、「大体分かった」という話で済ませてはいけないことがほとんどで、普通の会話とは全く違います。普通の会話では「こんなものでいいや」と済ませてしまうことがほとんどですが、専門用語が出てくるような局面では、逆にそれでは済まされない場合がほとんどです。従って、言葉の使い方というと、何かしたいときにいちいち、これがこうなって、こうなってと全部言わなくてはならないことになっています。これは、専門用語が使われる局面が違うので、普通の会話とは言葉の使われ方が少し違ってくるといえる一つの面です。

#### ・スライド15「専門分野の常識」

もう一つ、専門分野の常識です。知識という話からすると、お勉強して議論している分だけ、他の分野の人たちが知らないことを知っているわけです。それを何度も繰り返して話しているうちに、普通の会話の中ではとても当たり前とは言えないようなことでも、「こんなことは言わなくても分かる、当たり前だ」と思えてくるものがたくさんあります。ですから、専門家からすると当たり前なのだけれども、一般の会話では全然当たり前ではないという問題が出てきます。

これは意外にやっかいな話です。本人が当たり前だと思っていることを、当たり前でないと感じているというのは、なかなかつらいものがあります。一生懸命注意していると、それなりに当たり前ではないということが分かってきますが、大抵の場合は、これは当たり前だということですっ飛ばしてしまいます。

しかし、常識でない話を常識だと扱われると、先ほど言いましたように言葉の少ないところで情報を伝達しようと思っているときに、補足のしようがなくなり、一般の人は聞いていて破綻するということがたくさん起こります。

#### ・スライド16「詳しい説明を行うためには」

以上が基本的な問題ですが、もう少し別の観点から見てみましょう。そもそも、専門用語の使い方、専門分野の議論には、詳しい説明が要求されていると申し上げました。では、詳しい説明とはどうすればいいのでしょうか。

日常会話でも同じですが、言葉を使って詳しい話をしようとする、文章を一生懸命積み重ねていくことになります。何が何をしてどうなって、これはこういうもので、あれとはどこが違うといった

話を、一生懸命文章の形で説明するのが一般的な形です。しかし、論文にしても技術資料にしても、やはりこれについて話をしている、それを強調したいというものが、どうしても出てきます。文章で説明するのと、それが意味している対象というものを考えるときに少し話が違ってくるということがあります。

#### ・スライド17「詳細記述の例」

例えば、「電子計算機」を文章で説明しようとする、「電子的手段によって計算を高速に行うための機械」のようなことを言うわけです。これらは、ある意味でほとんど同じことを言っているのですが、並べてみたときの受け取り方が随分違います。「電子計算機」というと、一つの独立した物がイメージされます。ところが、文章で説明すると、どこに中心があるのか非常に分かりにくいということになります。高速が問題なのか、電子的なものが問題なのか、機械が問題なのか、そのあたりが漠然としてくるわけです。幾つか問題がありますが、とにかく電子計算機と一言で言ってしまった方がこれから説明したい対象をはっきり明確に示しているという感じが出てきます。

それから、文章で説明しようとするとき、なかなか嫌な話があります。こういうことを言うための言い回しが随分たくさんあるのです。あるときは、計算を高速に行うためにという説明を先に出して、電子的手段を応用してという話をするかもしれませんし、使う場面によって、説明の形がいろいろと変わってしまう可能性があります。そうすると、ますます何について話をしているのかがぼやけてしまうのです。説明の目的としている物事が、ひとまとまりの対象としてここにある、だからこれを説明したいのだという感覚が薄れてきます。何しろ、文章で言ってしまうと長々しくなり、何回もこういう言い方をされると非常に冗長な印象を与えてしまいます。ですから、専門用語という形で示さなければいけないのだという話になるわけです。

#### ・スライド18「専門用語」

そのあたりのところは、東大の影浦先生がうまくまとめておられます。一つは、分野で扱う物事をとにかく詳しく分類して表さなければいけないということです。これは、いろいろ詳しくどんなものかということについて説明を加えるということですね。それから、説明に当たって、対象になる物事を、一つの対象という印象の下に、きちんと提示できるような言い方がしたいということです。

ここでも変な用語が出てきますが、影浦先生は、termhood（用語性）と unithood（一語性）という説明をしています。termhood とは、その分野で強調して説明したい物事をきちんと表しているかどうかということです。unithood とは、先ほども言ったように、文章の形で長々と説明してもいいですが、それだとどうしても説明するときの感覚がぼやけてきてしまうので、一つの言葉にまとまった形で聞き手に示したいということです。また、あえて言いますと、日常語と区別できる方が望ましいということがあります。同じ日本語で説明するので、必ずしも専門用語と普段使っている言葉とをきれいに分けて話ができるわけではないので、そうすると日常使っている言葉と区別できる方が望ましいという話が出てきます。

#### ・スライド19「専門用語の生成」

では、こういった要求を満たすような用語を作るにはどうすればいいのかということが、次の問題

になってきます。

専門用語を作る際に、昔の古い言葉を使うということが随分ありました。ヨーロッパでは、ギリシャ語かラテン語です。日本では、大体中国から輸入した漢語のようなものを使います。これは、日常の言葉と区別するという点では非常にいいのですが、一方で分かりやすいかという点と、かなり分かりにくくなります。

歴史的経緯から言うと、ヨーロッパでは、ギリシャやラテンの辺りで学問が非常に進歩していましたが、その後、衰退してまたルネッサンスの頃に学問が盛んになってきました。そのとき、たまたまイスラム世界に残っていたギリシャ語やラテン語の文献が入ってきたという経緯が大きいです。日本語の場合は、かなりの部分を中国から輸入しており、漢語が非常によく使われています。そういうことがたくさんあると、こういうものを使わないと学問ではないというようなニュアンスも出てきて、権威的なものという意識も多少はありますが、今の場合は、こういう話はそれほど問題ではありません。ただ、古くから使われている専門用語として、このような古い言葉はたくさん残っているので、こういうものが随所に出てきます。

もう一つの方法が、これからお話しする複合語というものです。幾つかの違った言葉を組み合わせる結果として、一つの言葉を作ってしまうという方法です。もともと、一つの言葉はかなり単純なものしか扱っていません。例えば、犬なら犬で、非常に一般的なものしか示していないわけです。そこで、複雑な物事を詳しく表そうと思うと、どうしても複数の基本的な言葉を組み合わせることが必要になります。

例えば、先ほど電子計算機という言葉を出しましたが、これは基本的には三つの要素を組み合わせ一つ言葉として使われているものです。日常会話でも、こういうものは結構たくさん使っていますね。しかし、これから説明しようと思っている対象をなるべく詳しく説明できるような新しい言葉を作っていこうということが、複合語の基本的な考え方です。

#### ・スライド20「複合語とは」

少し詳しく話さなくてもいいかもしれませんが、どういう構成要素から成っているかということです。構成要素というのは、大体普通の言葉と違っていいのですが、ただ一部に「言葉」というと抵抗のあるようなものが出てきます。計算機や高速性といったように、「機」「性」「的」などというものもいろいろ使っております。こういうものは単独の言葉として考えるには少し怪しいので、これらも全部まとめて「言葉」でいいではないかという考え方もありますが、少し違った言い方をします。

#### ・スライド21「複合語の構成要素」

この言葉自体はどうでもいいのですが、morphem（形態素）という言い方をします。なぜこれを出したかという点と、ここにギリシャ語が典型的に出てくるからという点だけです。「morphé」はギリシャ語で、目に見える形という意味であり、「em」は、複雑なものを構成する基本的な要素のことを言います。

基本的には、ほとんどの言葉を含むけれども、それプラス少し短いものについて、形態素という呼び方をします。これを組み合わせて説明する対象を詳しく表すような言葉を作っていこうというのが複合語の考え方です。形態素は、いずれも基本的な意味を持っています。「機」は人工的に組み立てられた機械のようなもの、「性」はある性質を持っているということ、「的」は何か似ていることとい

うような基本的な意味を持っています。

#### ・スライド22「複合語の意味」

複合語は、原則として基本となる形態素の意味から構成されます。こうやってしまうと非常に簡単そうに見えますが、どのような形で構成されるのかとか、形態素の間をどのようにして結合するかといったことについては、実は結構面倒な話が起きてきます。先走って言ってしまうと、ここで分野の常識みたいな話が効いてくるので、出来上がった言葉の解釈が、実は簡単ではないという事情が出てきます。

#### ・スライド23「複合語の構成と形態素の分類」

少し専門的すぎるかもしれませんが、複合語の構成を考えると、形態素の分類ということが少し問題になってきます。文法で、名詞や動詞、形容詞などといいますが、名詞は物事という意味での対象、動詞は何かの出来事、形容詞は物事の様子です。ここで非常に大事なのが動詞、出来事です。例えば、何度も出てきている電子計算機は、「計算を高速に行う」「計算する」という動詞が中心になっている言葉です。

#### ・スライド24「文中動詞と名詞の関係」

動詞がなぜ重要かという、動詞そのものは一つの出来事を表すものなのですが、普通、出来事と言うときには、それに関連するいろいろな対象が関係してきます。

ここでは、「作る」という動詞を例に挙げています。「太郎は一ろくろで一粘土から一人形を一作る」という例文です。「太郎さん」は行動を起こして物を作る人、「ろくろで」は道具、「粘土から」は材料、「人形」は最終的に作られる物を表しています。

普段何げなく言葉の中で使っていますが、動詞というのは一つの出来事に関わる物事を周りに引っ張っているという事情があります。また、それぞれの物事は、動詞に対してある役割を持っています。動作する人、道具、材料などの役割を持っています。専門的な話ですが、これを文法の世界では、こうした役割を「格」や「項」といいます。このあたりは後の説明のために、詳しくは置きましたが、置いておきました。

#### ・スライド25「複合語とは」

さて、それでは複合語を作るときにどういうことになるのか。これは非常に乱暴に言うと、何かを説明する文の中に出てくる要素、いわゆる形態素をうまく取り出して組み合わせたものということです。この「うまく」というのが実は大変なことで、どの要素を取り出せば、目的とする物事を、きちんと指定できるのかということです。それには、とにかく強調したい要素を選んでいくことです。すると当然、取り出されずに省略されたものが出てきます。

例えば「電子計算機」では、高速に処理するのが目的でしたが、「高速に」というのは省略されてしまいます。われわれですと、「電子」も当たり前だということで、単に「計算機」と言うことの方が多いです。実はここで、何を強調するために選ぶのか、何は省略して構わないのかというところに分野の常識という話が出てきます。この手の議論をしているのだから、これは省略しても分かる

だろうというものが、どんどん出てきてしまいます。

#### ・スライド26「複合語を構成する要素間の関係」

さて、もう少し文法的な話になります。複合語には、言葉や形態素が二つ以上あります。その間の関係は、基本的には、意味の本体とその意味を何らかの形で制限するという形で成り立っています。

例えば「情報処理」だと、「情報を処理すること」ですが、「処理すること」が意味の主体です。何を処理するかという対象を「情報」というものに制限しています。そういう形で複合語が成り立っています。

これを「Head (主部)」と「Tail (修飾部)」といいます。ちなみに、日本語では「Head (主部)」が後ろに来て、「Tail (修飾部)」が前にきます。なぜしっぽから出てくるのかというと、もともとがラテン語の文法だからです。フランス語もそうですが、ラテン語では形容詞を後ろに付けるのです。このあたりは言語の系統で幾つかあるのですが、前の方に主部がくる言語と、後ろに主部がくる言語があって、日本語は後ろに主部がくる言語なのですが、ラテン語は前に主部がきます。その文法からいろいろ英語を経由して輸入しているので、Head が後ろに付いているという形になっています。基本的にはこのように主部と修飾部があって、主部が主な意味で、それを修飾部によって意味を制限しているということになります。

#### ・スライド27「主部と修飾部」

ですから、同じ形態素を使ったとしても、入れ替わってしまうとだいぶ意味が変わってきます。「情報処理」と言うと情報を処理することですが、「処理情報」と言ってしまうと処理される情報という意味になってしまいます。

二つの組み合わせの規則は非常にはっきりしていますが、順番を入れ替えると実際に示している物事がころっと変わってしまいます。

#### ・スライド28「複合語の例」

複合語の例をいろいろ出していますが、基本的には、その裏に文章を想定することができます。「情報環境」だと「環境で情報を利用している」という文章で、これを普通に言い直すと「情報を利用するための環境」ですね。「数値情報」「機械部品」「株式市場」「例外事例」など、いずれも適当な形に置き換えれば、ある文章で一つの複合語が示している物事の状況を記述することができます。

先ほど申し上げましたが、こういう文章の中から重要なもの、とにかく主部は重要なので、それを持ってきます。それに対して、修飾部としてどれが大事か、どれとどれを修飾部として持ってくればいいのかという判断になります。ところがこのあたりで、常識でもうこれは要らないとなると省略されるということが起きます。

#### ・スライド29「どの役割要素が取り出されているのか」

さて、文章の中から幾つかの要素を拾って複合語を作るという話をしました。文章には動詞が出てくるのがかなり一般的な形なのですが、動詞に対して、関連する物事はそれぞれ役割を持っていたわけです。ところが、例えば役割を示すためには、「で」「を」「から」などの文法的に助詞と言っているよ

うなものが日本語の場合は使われていて、これらが付いているので動詞に対してこの形態素や言葉はどんな役割になっているかが分かります。複合語の場合は助詞を省いてしまいます。そうすると、また面倒なことになります。

「風景写真」という言葉がありますね。これは風景を撮影した写真ということになります。ところが「衛星写真」というと、衛星を使った、あるいは衛星から撮影した写真ということになります。一見同じような構造ですが、この場合の「風景」と「衛星」は、写真を撮影するという出来事に対する役割が異なっています。

#### ・スライド30「衛星写真」

衛星写真というと、大体このようなものを想像させます。

#### ・スライド31「人工衛星スプートニクの写真」

#### ・スライド32「月の写真」

一方で、こうしたものが衛星写真と言われることは、あまりありません。しかし、これを衛星写真と言っていけない理由は何もないのですよね。月は地球を回っている天然の衛星ですから、それを撮影した写真だから衛星写真と言ってもいいのではないかという理屈も成り立つわけです。

#### ・スライド33「複合語では格の記述は省略される」

なぜそのようなことが起こるかということ、先ほどもお話したように、助詞が省略されているために役割が非常に分かりにくくなっているからです。ここでも結局「常識」が働いています。つまり、どのように使われることが多いかということを繰り返し経験することで、言葉とそれが表す対象との結び付きが判断できるようになるというのが実際のところですよ。

#### ・スライド34「衛星一写真の解釈」

そこで、「衛星写真」の話です。先ほどの月の写真やスプートニクの写真など、衛星写真と言ってはいけないということはありません。しかし、圧倒的に多い使い道は、衛星から天気の状態や、どのような資源があるか、地形がどうなっているかということを見るために使うということです。ですから、経験したもののほとんどが上空から見た写真であり、それをまとめて衛星写真と呼ぼうということになります。

また、別の考え方からすると、人工衛星スプートニクそのものを写真に撮ってしげしげ眺めるという目的は、よく分かりません。外側に何か傷があって、それがトラブルの元になっているかという診断をするということも考えられなくはないですが、あまり効率がいい方法とは思えませんし、実際にそれをやることもほとんどないでしょう。

そうすると、衛星写真というのはそもそも、気象衛星や資源衛星の写真のようなものを見て、これが衛星から撮った写真だと言っているの、そこで常識になってしまっているのです。ただ、これは専門分野の内容が分かっている人には当然なのですが、その分野の知識のないとか、分野に馴染みのない人にとっては、なかなかつらい話です。なぜスプートニクの写真みたいなものを衛星写真と呼ばないのかと言われると、なかなか説明のしようのない話になりますね。

### ・スライド 35 「複雑な複合語の構造」

そういうことで、複合語では形態素、必要なものを集めてきて作るのですが、その集め方、その組み合わせ方には、結構、分野の常識のようなものが入ってきているということになります。

さて、もう少し複雑な場合を考えてみます。「衛星写真」は2要素の複合語でしたが、「電子計算機」や「有限要素法」のように3要素以上の複合語もあります。これは、主部と修飾部があることは同じなのですが、組み合わせが起きる順番が変わってきます。「電子計算機」の場合は「計算機」という言葉が先にできて、その電子的方法という形です。「有限要素法」の場合は「有限要素」という言葉が先にできて、それを使って何かを解析するというような話になります。

厳密にこのあたりの複合語の意味を気にし出すと、どちらの構造が正しいかを決定する必要があります。しかし、これもまた分野の中で、これはこういうふうに使われているから、こちらの構造の方が正解だというような言い方しかないことも多いのです。これもまた結構面倒くさい話になりますね。

### ・スライド 36 「順序が慣れないし約束から決まる場合」

しかし、その辺の組み立ての順序のような話は慣例で、ここでは医療の言葉を出していますが、医療や化学の場合は、言葉がものすごくたくさん出てくる分野です。そもそも専門用語は詳しい説明をするためにあるものなので、それでなくても言葉の数が多いのですが、対象を細かく分類しています。医療や化学の世界では、何しろ化学などは化合物だけでも何十万とある世界なので、ある程度、この組み立て方についてお約束をしなければいけない場合があります。

例えば、「急性細菌性髄膜炎」という言葉は、この急性と細菌性は実は入れ替えても構わないのですが、入れ替えることは原則としてしません。入れ替えると、後で探するとき大変なことになるからです。こういう時間的経緯と原因のようなものがあるときには、時間的経緯を先に置くという命名法 (Nomenclature) が決められている場合もあります。

### ・スライド 37 「長い複合語」

また、複合語というのはいくらでも長くできます。逆に言うと、細かな内容を示そうとすると、いろいろな制約を積み重ねざるを得ないので、非常に長くなります。そうすると、覚えにくいし、言にくい。「電子計算機」の「電子」を取って「計算機」にするというふうに、常識だからこれはもう要らないよねということで省いてしまうこともあります。短くする方法も出てきます。

### ・スライド 38 「複合語の省略」

省略形というのは、英語ではとても一般的です。abbreviation ということで、例えば Information and Communication Technology を頭文字だけ取って ICT というふうに並べます。これは英語では非常によくやることです。訳の分からないアルファベットが3文字、4文字、5文字と並んでいるものが山ほど出てくるのですが、これも元の形を知らないと、もうどうしようもない、お手上げということになります。これも専門用語が分かりにくい例の一つです。

ただ、日本語では、あまりこういうことをしません。ないわけではありませんが、かなり少ないです。むしろこれは常識だから要らないということで、要素を落とすことの方が多くなります。この原因はよく分かりませんが、漢字という表意文字と、アルファベットという表音文字の違いなのではな

いかというのが私の推定です。漢字のような表意文字が並んだものの途中を間引きしてしまうと、何を言っているか分からなくなるからだという気がしています。ただ、このあたりはもう少し調べてみたいと思っています。

#### ・スライド39「英語の Abbreviation」

abbreviation は、コンパクトになって非常に便利なのですが、問題も多いです。先頭の文字だけに省略してしまうと、様々な専門用語が同じ形になることがあります。Automatic Teller Machine というときの ATM は、銀行でよく見かけるキャッシュ・ディスペンサーのことです。ところが通信の世界では、Asynchronous Transfer Mode を ATM と略したがります。どの話をしているかという文脈がきちんと分かっているならば、それほど混乱しませんが、たまには大変なことになることもあります。特に分野横断的な話をしようとする、結構つらいことになります。

英語の場合、頭文字だけを取る abbreviation が多いのですが、便利な代わりに、危険なものでもあるということです。

#### ・スライド40「日本語で省略が起きる例」

日本語の場合は、あまり省略しないと言いましたが、省略が起きる例も確かにあります。一番顕著なものは固有名詞です。例えば、電子情報通信学会のことを「信学会」と略しますが、知らなければ「一体何だ」と思います。「経団連」も、日本経済団体連合会だということを知っていればいいですが、略称だけから元の言葉を想像するのはつらいものがあります。ただ、固有名詞はかなり特殊で、それは一つしかないわけですから、これをこういうふうと呼ぼうと言ってしまえば、別に違和感はないということもあります。先ほど、表意文字で途中を間引くと妙なものになると言いましたが、「信学会」などはまさにその例です。でも、固有名詞なら許せるという感じもします。

#### ・スライド41「一部の医学用語」

一部の医学用語では、逆に省略するのが普通というものもあります。「心臓筋肉」を普通は「心筋」としか言いませんね。心臓の部分にある筋肉の話をするときには、「心臓筋肉」と言わずに「心筋」と言います。これには理由があります。「臓」や「肉」といった言葉は、むしろ間違いがないよう添えてあるようなところがあり、臓器だと分かれば、心臓の「臓」がなくても構いません。では、なぜ「臓」を付けるのか。漢語では伝統的に2文字にすると安定的な響きになるようで、1文字のままにしておくと、どうも宙ぶらりんで気持ちが悪いということで、「心臓」も「筋肉」も2文字にしてあるのです。

「静脈注射」が「静注」というのはちょっとすごいですが、でも、こうやってしまいますね。

「心筋」の例は、形態素の記述が冗長だったので、そこを省いても意味としてはおかしいことにならないという例です。「静注」の方は、診療記録の都合があるのではないかと疑ってしまいます。

何しろお医者さんは忙しいところでカルテを書いているので、あまり長いものを書きたくないということでも仕方がないのかなと思います。

#### ・スライド42「専門用語の分かりにくさ」

そろそろまとめに入りたいと思います。専門用語が分かりにくいというご意見は、よく分かります。

要するに、使う目的からして、特定分野の対象を細かく分類して、はっきり区別がつくように話さないといけません。ですから、やたらと用語の数が増えるのです。耳慣れない古語や外来語も伝統的に使われているので、出てきてしまいます。そもそも複合語は、それぞれの形態素についてはある程度見当がついても、それがどう組み合わせ、それぞれがどういう形で意味を制約しているかということを知解するには、その分野の常識が必要になってきます。ですから、分野内で内輪で話している分には非常に便利のいいものなのですが、やはり分かりにくいところが多々あるだろうというのが実際の感覚です。

#### ・スライド43「分野常識の難しさ」

しかし、分野常識というのは結構難しいですね。これはもう説明しなくても分かっていると信じ込んで、常識だと思っているわけですから、それをいちいちきちんと説明が要るのだと意識するということは、なかなかつらいものがあります。

では、どうするのか。専門家としては、やはり自分の常識を見直すことが大事なのかなと思います。ただ、常識を見直すといっても、同じ分野の人間とばかり話していて常識の見直しができるはずがないので、やはりこのような機会を作っていただいて、皆さんといろいろお話をさせていただくことが大事です。一般の方としては、分からなくなったらすぐに聞くことが一番の早道だと思います。話している本人に自覚がないわけですから、少し自覚を促すためにも、それはちょっと一般常識ではないのだと言っていただくのが早道かなと思います。結局は、交流を持つ、コミュニケーションの機会の多さが大事になってくるのではないかと思いますので、こういう機会をはじめとして、いろいろな交流の機会を作っていただければと思います。

長い時間、ご静聴ありがとうございました。